

II 3.11 以後の思いとつながり Feelings and Connections since 3.11

3.11 のあと—福島から広島へ 求められる地球時代感覚

After 3.11 Connecting our Feelings from Fukushima to Hiroshima: Asking for a Sense of the Global Age

堀尾 輝久

HORIO, Teruhisa

〈福島からの——武藤類子さんスピーチより〉

皆さん、福島はとても美しいところです。東に紺碧の太平洋を臨む浜通り。桃、梨、りんごと、果物の宝庫の中通り。猪苗代湖と磐梯山のまわりには黄金色の稲穂が垂れる会津平野。そのむこうを深い山々がふちどっています。山は青く、水は清らかな私たちのふるさとです。

3.11 原発事故を境に、その風景に、目には見えない放射能がふり注ぎ、私たちはヒバクシャとなりました。大混乱のなかで、私たちにはさまざまなことが起こりました。

(中略)

毎日、毎日、否応なくせまられる決断。

逃げる、逃げない

食べる、食べない

洗濯物を外に干す、干さない

子どもにマスクをさせる、させない

畑をたがやす、たがやさない

なにか物申す、黙る

さまざまな苦渋の選択がありました。

そしていま。半年という月日のなかで次第に鮮明になってきたことは、

真実は隠されるのだ

国は国民を守らないのだ

事故はいまだに終わらないのだ

福島県民は核の実験材料にされるのだ

ばくだいな放射能のゴミは残るのだ

大きな犠牲の上になお、原発を推進しようとする勢力があるのだ

私たちは棄てられたのだ

私たちは疲れと、やりきれない悲しみに、深いため息をつきます。でも口をついて出てくる言葉は、

「私たちが馬鹿にするな」

「私たちの命を奪うな」です。

福島県民はいま、怒りと悲しみのなかから静かに立ち上がっています。

(後略)

なにか物申す、黙る
 さまざまな苦渋の選択がありました。
 そしていま。半年という月日のなかで次第に鮮明になってきたことは、

真実は隠されるのだ
 国は国民を守らないのだ
 事故はいまだに終わらないのだ
 福島県民は核の実験材料にされるのだ
 ばくだいな放射能のゴミは残るのだ
 大きな犠牲の上になお、原発を推進しようとする勢力があるのだ

私たちは棄てられたのだ
 私たちは疲れと、やりきれない悲しみに、深いため息をつきます。でも口をついて出てくる言葉は、
 「私たちを馬鹿にするな」
 「私たちの命を奪うな」です。

福島県民はいま、怒りと悲しみのなかから静かに立ち上がっています。

(後略)

私はこのエッセイの冒頭で、「9.19 さようなら原発集会」での武藤類子さんの、詩のようなスピーチ「いま、ふくしまの思い」から敢えて分ち書きして引用させて頂いた(『世界』2011, 11月号, web「原子力発電を考える石巻市民の会」等を参照)。それは、故郷を失った人々の深い悲しみと怒りが、私たちの心をえぐるように伝わってくるからである。そして、離れてある私たちの日常のなかで、高まる安全意識からではあるが、身の周りの商品産地に目

を配り、瓦礫県外処理にクレームをつけ、ホットスポットを気にする自分がおり、そこでは福島の人たちのことが、意識の外にあることに、あらためて、この福島からの声が気付かせてくれるからである。

〈私たちはヒバクシャとなり〉〈私たちは棄てられたのだ〉

棄てたのは東電や政府ばかりではない。自分はどうか。「怒りと悲しみのなかから静かに立ち上がって」いる人々と、どのように心を通わせ、なにをすることができるのか。なにをするにしてもその「怒りと悲しみ」に感応する心を持ち続けること、何かできることはないか、邪魔にならないように行動することであろう。三陸大災害を二度経験した宮沢賢治(1922, 1933)の、「そこに行って」の呼びかけを思い起こして。

造られた安全神話

さて、原発には安全神話、成長神話、そして安保神話の三つの神話が不可分に結びついている。このことを前提にまずは安全神話についてメモしておきたい。

原発は「クリーンで、安全で、安い」。この神話はつぎのように説明されてきた。

〈原発はCO₂を出さず、環境に優しいエネルギーであり、現代日本の科学技術をもってすれば絶対に安全で、低コストなのだ〉

この安全神話を支えてきたのは〈原子力なくしては電力の安定供給はなく、安定供給なくしては経済成長なし〉という経済界の主張である。

神話はタブーをつくりだし、批判を許さない。安全神話とともにつくられていったのが「原子カムラ」と「原子力村」である。前者は政財官学の複合的結合体であり、安全神話に疑いをはさむものは政

治経済の中軸から外され、批判を持つ科学者たちは「ムラ」から排除されていった。

マスコミのメスも刃がたたず、やがて自らも広告収入がらみで取り込まれていく。大新聞の原発に関する見解の軌跡はそれを物語っている。

教育もまた学習指導要領と教科書検定をとおして、安全神話の再生産に大きな役割を担わされてきた。

中央の「原子カムラ」は原発立地のための利益誘導システムを通して地域社会を巻き込み、原発地域は「原子力村」となって反対派を村はじき（むら八分）するシステムがつくられ、住民の意識もやがてその「村」にとりこまれていく。その先には雇用拡大と地域活性化の大宣伝のもとで、安全性を無視しての「経済の論理」がまっている。それは地域を破壊し、地域内外の格差をひろげてきた。

そして大災害の後も、安全神話に自らも身をゆだねてきた責任あるひとたちは、事故の真実を覆い、被害をできるだけ少なく報告してきた。SPEEDI の発表を遅らせ、メルトダウンを隠すことによって被害を大きくした。

そんななかで、財界の要望を担っての関西電力大飯原発の再稼働。「私の責任」でゴーサインをだす野田首相、それを支える経産省の役人たち。原子力村は破壊され、無惨な姿を残すばかりだが、「ムラ」はなおも健在、その無責任体制もゆるぎないようにみえる。しかし、安全神話を必要とし、それを創り出す社会的、政治的力学の構造は強力にみえても、自然と真実の前ではもろいものであることを、今回の事態は示してくれている。

安全神話は科学への信頼から生まれたものではない。経済性、つまりは利益を求めてリスクを「想定外」とし、その枠のなかに科学を閉じ込めてつくりあげたものである。

日本の地震学、地球科学の発展は目覚ましく、その提出する知見は地震や津波の歴史研究と相まって原発立地の不適切性を警告するものばかりである。

原発技術に即して言えば、科学者なら誰でも、メルトダウンの危険性については知っている。使用済み核燃料の処理技術が未開発であることも知っている。六ヶ所村の再処理施設が事故続きで機能していないことは衆知の事実である。「トイレの無いマンション」という比喻は的確にその危険性の所在を示している。未完成のトイレからプルトニウムを取り出そうとする発想には、核武装への隠れた野望も見え隠れしている。

再処理は断念し、近年ではモンゴルの砂漠の地下に埋めるという話があると知り、また原発を巨大商品として、ベトナムをはじめアジア、アフリカにもその市場を求めていまも交渉がすすめられていると知って、一人歩きする経済の論理の非人間性に唾然としたが、そこには原発技術保持国間の国際競争という問題も浮かび上がってくる。脱原発には国際的な連帯が不可欠であることもみえてくる。

この10月半ば、リトアニアで原発建設を問う国民投票がおこなわれ、反対が60%を超え日立製作所の原発プラント輸出計画も見直しが求められるよう報じられた。またシンガポールではフクシマ後「リスクが利益を上回る」として原発設置に危惧の念が広がり導入が見送られたという（朝日新聞10月16日、17日）。それにしても原発の是非についての住民投票を定める条例作りに反対する地方自治体（大阪、東京そして浜岡）の動きには日本の民主主義は名ばかりのものなのかと呆れるばかりである。

原発王国フランスもオランダ政権は原発依存を75%から50%にする方針を出した。これまでタブー視されていた原発論議もようやく始まったようだ。

フクシマの後、いち早く脱原発に踏み切ったドイツの国営放送は昨年『フクシマの嘘』を放映、いまでもYouTubeで見ることができる。ドイツのジャーナリストのヨハネス・ハノ氏のチームが3.11の直後から白衣と防護服で身を守り監視の目をくぐって退去地区に入り映像を撮り、関係者とのインタビューで構成した貴重なドキュメントである。そのなかには菅前首相、佐藤栄佐久前福島知事への聞き取りもある。佐藤知事は原発に感じた疑問を率直に東電に質問するうちに知事追い落としの罠にはめられ、菅首相は脱原発を主張した故に首相の座を失ったという記者のコメントには説得力がある。アメリカのGEから東電に派遣されて定期的に点検を行ってきたケイ・スガオカ氏とのインタビューでは東電が従来から事故を隠し、報告にも修正を求められたことを告発している。点検に責任を持った人物による東電の隠蔽体質への批判は痛烈である。この三十年、告発無視と嘘で固めた安全神話の中で、原子力の「ムラ」と「村」に守られての福島原発であったことが語られていく。

このドイツのジャーナリストは「なによりもこれだけの嘘がいまだに糾弾されずにいる日本の現状が一番怖い」と語り、「つまり黒幕はアメリカだろう」というつぶやきでおわっている。この放送が一般ジャーナリズムでは紹介されず、YouTubeでしか見られないという現状もまた怖いことと言わねばならない。アメリカの原発への圧力もいまや露骨である。

科学者と安全神話

科学技術者が科学者としての精神を持っている限りこの神話に加担することはない。科学者は「原発

は絶対に安全だ」などとは決していうことはない。

「想定外」は科学者の言葉ではない。分からないことは実験によって問題点を探り、確かめる。しかしその上で、科学と価値をめぐっての態度決定の問題がある。

3.11のあとNHKはアメリカの科学者の声を伝える報道番組を放映した(8月14日)。そこに登場した二人の科学者の発言を紹介しよう。

ケネス・バジロ氏。彼は原発事故のシミュレーション研究をやってきた。フクシマと同じ事故は必ず起きる。自分のシミュレーションは当たった。福島の人には気の毒だが自分は科学技術者としての誇りをもつ。原発がある限り自分の事故予測研究は有効だ。と語っていた。

デール・ブライデンボー氏。彼は原発の安全性に関する委員会の委員長として、その危険性を警告する報告書(ラスムッセン報告)をまとめたが採用されず辞任。その後も危険性を警告し続けてきた。彼はインタビューに答えて原発はつくるべきではないとはっきりと断言していた。

この二人の科学技術者の違いはどこからくるのか。科学は何のためにあるのか。科学と価値、科学者の人間性の問題といわざるをえない。原爆作成にかかわった科学者たち(アインシュタインを含めて)の内面、その苦悩とも重ねて考えさせられる番組であった。

日本で原発推進の第一歩となったのは1955年前後、アメリカの支持と指示を得ての中曽根、正力グループの動きである。アメリカにとっては平和利用の名による核アレルギー対策であり、日本の保守層にとっては原爆開発への潜在力を手にすることでもあった。

当時の日本の科学者の多くは原子力の平和利用に

は前向きではあったが政府推進派の動きには危惧の念を抱き、湯川秀樹、朝永振一郎、坂田昌一、武谷三男らは政府の委員から身を引いた。あるいは最初から外された。原発、放射能の危険性を訴え続けた次世代の研究者には高木仁三郎、小池裕章、安斉育郎らがいる。彼らに対する大学や学会の処遇も記憶されてよい。内部被曝問題を訴え続けてきた広島の肥田舜太郎医師や素粒子物理学の澤田昭二（いずれも被爆者）のことも忘れてはなるまい。その後続く世代の科学者たちの声も次第に大きくなってきている。そこには依然として原子カムの圧力も強いようだ。地震学者で浜岡原発の危険性を具体的に指摘しその廃炉をめざすべきだと訴えた石橋克彦氏に対して班目春樹原子力安全委員長は「原子物理学会では聞いたことのない人だ」といって無視をした。小佐古敏荘東大教授も同様の発言をしたという（石橋「まさに原発震災だ」『世界』2011, 5月号）。科学者の批判精神に枠をはめる「ムラ」の政治経済学とともに学問社会学的分析が求められている。

つながる福島と広島

今年（2012年）の8月6日は特別の日となった。それはヒロシマとフクシマが、その被災者の思いが、「反核」としてむすばれ、それが世界へ向けて発信されたからである。広島市長の平和宣言にも、子どもたちの訴えにも、福島への思いが語られていた。「核と人類は共存できない」という松井市長の提起には反核兵器だけではなく脱原発への思いも込められていた。福島からは浪江町の馬場有町長も参加し広島から学びたいと語っていた。広島の被爆者団体は福島の子もたちを受け入れる活動に取り組み、市民は福島の被災者を迎えるための住居の確保に取り組んでいる姿もテレビで紹介されていた。絶望的

な状況に耐えてここまできた広島の人たちの福島の人たちへの心配りには格別のものがあり、福島の人たちには大きな励ましになっていることは間違いあるまい。

広島と福島がつながるとはどういうことなのか。その心の通い合いを支えているものは、核という共通の苦しみのなかでの連帯ということもできよう。苦しみに耐えてきた生のたくましさに学び励まされる関係であり、励まし合う関係であり、原爆も原発も一つのこととして「反核」へ向けて歩み出そうとする志であり、その苦しみの連帯をこそ日本と世界の人々が共有してほしいと訴えているのだ。原水禁世界大会にも参加した浪江町長の思いもそこにあったのだろうと思う。

核の被害者は日本だけではないことを改めて思う。長崎の原爆資料館には「私たちの声も聞いてください」という一室があり、そこでは核実験によって汚染された地域、アメリカのネバダ、旧ソ連のセミパラチンスク（カザフスタン）、マーシャル諸島のビキニ、フランスのムルロア環礁などの周辺住民の被災に苦しむ人々の映像とその声がながされている。旧東ドイツのウラン鉱山の労働者、第五福竜丸の映像も語りかけている。

それに、スリーマイル、チェルノブイリ、フクシマの声もかさなってこよう。東海村 JOC 犠牲者のことも忘れてはなるまい。

原水爆禁止を求める世界の声もフクシマを通して、脱原発をふくめて NO NUKES の声となって運動の幅も深さも増してきている。

大飯原発再稼働を機に、核反対の市民の声は、この夏、毎週金曜日十万人の規模で、首相官邸を取り囲むデモが繰り返され、寒空のもとでも続いている。その声はオスプレイに反対し、基地はいらない、安

保条約を問い直せという沖縄の人たちの声とも重なってこよう。

被害にあった人たち、抑圧され、犠牲を強いられた人たちの声を貫くもの、それこそは人間としての共通の苦しみ（compassion）であり、抑圧を拒む人間に共通の感性（human sentiment）であり、それを結びつけ変革する力となるものこそ人間のもつ開かれた理性（raison ouverte et universelle）の普遍的な力ではなからうか。

改めて「地球時代」の思考を

私は近著（『未来をつくる君たちへ 地球時代をどう生きるか』清流出版）のあとがきに「大地震と原発災害は3.11として日本史のみならず世界史そして地球史にも刻まれることでしょう」と書いた。

地震や津波は地球は生きて動いていることを、目の前で、にんげんを叩きのめす仕方ですべて示してくれた。「地球にやさしい」というものいいそのものに、にんげんの傲慢さが隠されていることにも気づかせてくれた。地球こそが私たちに優しくもあれば酷いこともあるのだ。地震や津波そして台風も繰り返しそのことを警告しているのではないか。

日本列島の近くで、あるいはその真下で、四つのプレートが重なり、衝突し、潜り込むプレート運動が引き起こす地震や津波は今日の地震学、地質学、地学のプレートテクトニクス理論によって説明がつく。アルフレート・ヴェーゲナーの『大陸と海洋の起源』（1915）は一度は空論としてしりぞけられたが、いまではプレート理論の先駆的研究として位置づけられている。

地球＝宇宙科学の前進は、私たちに「地球時代としての現代」という時代感覚を求め、日常の生活、地域の人々とのつながりも、国を越えて、世界と結

ぶ方向で開いていくことが求められていよう。

科学の前進は、未知の世界のひろがり教え、真理真実の前に謙虚であることを私たちに求めているのだ。

隣人からの励まし

あの日の直後、韓国の詩人 高銀さんが「日本への礼儀」という詩を書いている。（ハンジョレ新聞 2011年3月15日、『世界』2011年5月再録）。

どうしてあの空前絶後の災害に

口をあげ

空言を吐けようか

どうして あの目の前のまっ暗な破局に

口をつぐみ

顔をそむけられようか

なすすべもなく ただただ画面を見つめる

（中略）

人間の安楽とは いかにも不運であることか

人間の文明とは いかにも無明であることか

人間の場とは いかにも虚妄であることか

あの唐山 あのインドネシア

あのハイチ

あのニュージーランド

今日再び 日本の事変で

人類は 人類の不幸で 自らを悟る

しかしながら 日本は今更にうつくしい

決してこの不幸の極限に沈没せず

犯罪も

買い占めも

混乱もなく

相手のことを自分のことと

自分のことを相手のことと思い
この極限を耐えぬいて ついにうち克つ

今日の日本は
ふたたび明日の日本だ

わが隣人 日本の苦悩よ その苦痛の次よ
いまの日本をもって
のちの日本 必ずや立ちあがらん

1923年 関東大震災のことが頭をよぎり、襟を
正して、高さんの想いを胸に刻んだ。
いや、高さんのこころざしはもっと高貴だ。
私たちは あの唐山、あのインドネシア、あのハ
イチ、あのニュージーランドに、そしてこの夏のト
ルコ地震に、どのような想いを馳せただろうか。

〈人類は 人類の不幸で 自らを悟る
わが隣人 日本の苦痛よ その苦痛の次よ
いまの日本をもって
のちの日本 必ずや立ちあがらん〉

高銀（コ ウン）さん、ありがとうございます。
高さんは私と同年生れなのですね。

2012.10.20 チュニジアから帰って

堀尾 輝久（東京大学名誉教授／教育学）